

生物系大学院生のための英語コミュニケーション能力 ステップアップ戦略

白岩善博
生命環境科学研究科教授

エピソード

5月にある国際会議が日本で開かれた。公用語は英語で、参加者200人程度の小さな学会であるが既に20年以上の歴史がある。その会議の席上で実に「珍しい発言」があった。アメリカ人の座長がセッションに先立ちこう述べたのである。「我々英語を母国語とする人間は、日本人に感謝しなければならない。なぜなら、彼らが英語を話すために多大な努力をすることによってこの会議が成り立ち、多くの研究情報が自分たちの語学習得の努力なしに得られるからである。」

読者の皆さんは、この言葉をどう聞き、どのような感想をもたれたでしょうか？読者の専門分野によっても異なるかもしれませんが、多くは複雑な心境になったのではないのでしょうか？実は、この話には伏線があり、前日までの日本人発表者が会場からの質問に十分答えられず満足な議論ができ

なかったケースがいくつかあり、一部の外国人参加者が不満を持っていたという事情があった。発表者の研究成果が素晴らしい程それに対する嫉妬と得ようとする情報がかうまく引き出せないイライラが重なり尚更不満が高まることになるようである。想像するに、前の晩に飲みながらも「日本人の英語」についての議論が一部で盛んだっただろう。くだんの座長はそのような状況に対して意見を述べたものと思われる。似たようなケースはどの国際会議でも見られるが、座長がわざわざマイクを持ってこのような発言をするのは大変珍しい。

生物学における英語の必要性と現状

英語が共通語となってきたのは世の趨勢で、生物学も例外ではなく、英語の読み書き能力や会話能力無くしては生物学はできない。最近では、多くの大学院生が気軽に国際学会に参加するようになったことに

よって、大学院生の語学力の向上も重要な課題となってきた事情もある。1980年頃までは大学院の入学試験には第二外国語試験があった。生物学ではドイツ語が主流で、学生同士の会話でもドイツ語の単語を織りまぜて話すのが粋な学生の証であった。しかし、第二外国語の習得にあまり興味のないアメリカ人が生物科学をリードするにつれて(？)、英語しか通用しない世界へと徐々に変わってきて、もはや日本の生物系大学院入試でも第二外国語を課している大学はもうなく、英語一色の世界へと変わってしまった。このような状況を反映して一部の学生の英語力は随分良くなってきていると思うが、平均的学生のそれは残念ながら低下傾向にあるように思う。国際化の時代となり、留学生が身近にいるケースが多くなったこと、帰国生徒など外国生活を体験した学生が格段に増加していること、学生といえども外国旅行の経験が増加していること等により、大学で英語を話す機会は格段に多くなっていると思うのに不思議である。筑波大学においては、受験英語の成果で読み書きについてはある程度の能力は培われており、学類入学後に長い空白期間ができないようにさえすればある程度の英語能力を維持していける状態にあるものと思う。この意味で学類との密接かつ有機的連携が大学院生の英語能力維持には不可欠

な要素となるものと認識している。

生物系2専攻(構造生物科学専攻、情報生物科学専攻)の英語教育基本戦略

(1) 大学院必修英語導入戦略:

語学教育が一朝一夕になるものではないことは自明である。そこで、学類との密な連携が鍵となる。生物学類では基礎科目としての英語を必修とし、専門課程に進んでは専門英語として外国人教師および生物専門教員による授業が各学年で実施され、比較的充実したカリキュラム構成となっている。このような学類での英語教育カリキュラムを受けて、大学院生物系2専攻(構造生物科学専攻、情報生物科学専攻)では、平成15年度から大学院の必修授業として外国人教師R. Weisburd博士による学術論文の書き方、生物学セミナーおよびPresentation of Scientific Informationを開講しており、学生の評価も高く、今後とも継続する計画である。

(2) 入試改革による戦略

平成19年度大学院入試(平成18年8月実施)から、専攻独自で作成する外国語試験を止め、代替としてTOEICもしくはTOEFLのスコアによってその英語能力を判定することに決定し、既に専攻ホームページ上で通告済みである。本入試改帯の目的は、大

学院受験者に対して入学前から英語能力の重要性を認識させ英語の勉強を継続的に行う習慣を付けさせること、および、満足できる点数が得られるまで何度でも受験する機会を与え、一発勝負的な英語能力判定を回避することによって、英語の点数の高低によって合否が決定されるデメリットを回避する目的がある。また、従来の筆記の外国語試験ではできなかった「Oral-Hearing能力」の向上を要求することにも特徴がある。その結果、学類生および大学院生の双方にその重要性を認識させることができることは、大きなメリットである。

(3) アウトソーシング導入戦略：

平成15年度から、生物学類で英語教育専門業者へのアウトソーシングによるTOEIC講座が開始された。さらに、平成16年度から、TOEFL教室を主宰するLINGO L, L, C, の林功代表 (Master of Arts、ワシントン大学) を非常勤講師として依頼し、大学院生および生物学類生の両方に対して積極的なTOEFL教育を始めたところである。これらの教育システム導入によって、英語コミュニケーション能力向上プログラムの提供を開始している。また、このような正規の授業のみならず、双方の連携による特別講習会の実施も選択肢の一つとして加える計画である。

(4) 学生交流協定活用戦略

生物学類ではマンチェスター大学との学部間交流協定を延長し、学生の派遣や受け入れを通じて英語能力のみならずいわゆる国際感覚も身に付ける機会を積極的に提供している。このような学類での活動を大学院においても共同して活用し、大学院生の交流まで広げることができれば更に有効と考えている。勿論留学生に対して魅力あるカリキュラムの提供は当然としながらも、「留学生を引き受けて英語で会話しなければならない状況を作ることが、日本人学生の英語能力向上に有効であろう」との期待もある。当生物系2専攻においては、多くの留学生が学んでおり、学生相互の交流成果が期待されるところであるが、日本人学生の英語能力が上がる前に、留学生の日本語上達が速く、こちらの期待通りとはなっていない。

オランダやドイツでは英語による大学院授業が行われている。このようなことが日常的に行われれば大学院生の英語能力が上がるのは当然期待できようが、多くの場合教員と学生の双方の多大な努力が必須のように思える。ヨーロッパの学生は地理的な利点もあり、英語が上手い。英語のみならず2-3ヶ国語を話すことはそう稀ではない。フランス人やイタリア人の発音は非常に聞きとりにくい、聞き取りは充分にできて

いるのが特徴であろう。学会などでは、多くの場合、聞き取りがうまく行かず、質問が分からずに答えに窮する場合が多い。陸続きのヨーロッパ諸国と同じ状況を日本の大学で作ることは当然難しいが、何らかの対策が必要であろう。

以上を総合的に考えると、英語は強制的要素を入れて鍛錬するのが必要ではないかと思うが、本人のモチベーションを高めなければその効率をあげることができないのは自明である。したがって、魅力ある教育プログラムを用意して学生の自主的取り組みを待たねばならない。

「生物科学英語特別講義」の開設

1 単位 15 時間の集中講義として、生物科学英語講座を実施する。内容は実践的な TOEFL 講座で、「CBT TOEFL213 集中実践講座」と銘打って、TOEFL 213 点の取得を目指す指導内容である。TOEFL 213 点は、アメリカの大学に入学するために要求される最低の点数である。もちろんこの程度の点数をクリアしている生物系学生は既にいるが、全員がこの基準を満たすものとしてこの点数を目標値に設定した。私が知っている筑波大学生物学類生の TOEFL (CBT) 最高点は 297 点であるが、これは例外的な例であり、多くの大学院生はさらなる努力が必要である。

大学院生に対する英語教育の目的は明確に 2 つある。一つは研究上日々要求される情報交換のためのツールとしての重要性であり、もう一つは大学院修了の基本的要件として期待される基礎学力的な国際言語習得能力としてのそれである。

一方、日本における就職や入社後に課される英語テストは TOEIC であり、TOEIC に対する取り組みも必要である。TOEIC は TOEFL 作成会社に日本側組織が依頼して日本人向けのテストとして 20 年程前に発足したものであるが、今や受験者数は韓国の方が多くなっているとのことである。日本の企業の多くは昇格の条件として、TOEIC の基準点を設けているようであり、ある一定点数を取得していないと管理職には成れない時代が既に来ているのである。「高度職業人養成」を掲げている大学院では、在学中に一定の点数を修了要件の一部として課すくらいのことはやっても良いのではないだろうか。事実、一部の国立大学法人では既に実施に入っているとの情報がある。

提言

語学はいくら教え込もうとしても好き嫌いや能力差があるという意見は十分理解できるが、ある程度の会話能力を身につけさせるにはノルマを課して「嫌でもやらせる」ことも必要であると考えている。いつのこ

ろからか教育する側がいやに物わかりが良くなり過ぎて、「もし良かったら勉強して下さい」等という自由選択的教育の風潮が強くなっているように思える。しかし、教育する側が「大学院を修了する学生は、これくらいは必ず身につけるべきである」というハイレベルの要求や、「10年後に感謝される過酷な要求」を、自信を持ってもっと学生に課しても良いのではないだろうか。

山口大学では「TOEICを利用した英語教育」が先の教育COEとして採択され、世の中の情勢も既に変化してきている。我々は既に以上のような「英語が話せる生物系大学院生養成のための教育プログラム」の実施に向けて既に走り出しており、このような取り組みに対して、大学当局の理解と支援を切に期待する次第である。

(しらいわ よしひろ／情報生物科学)